

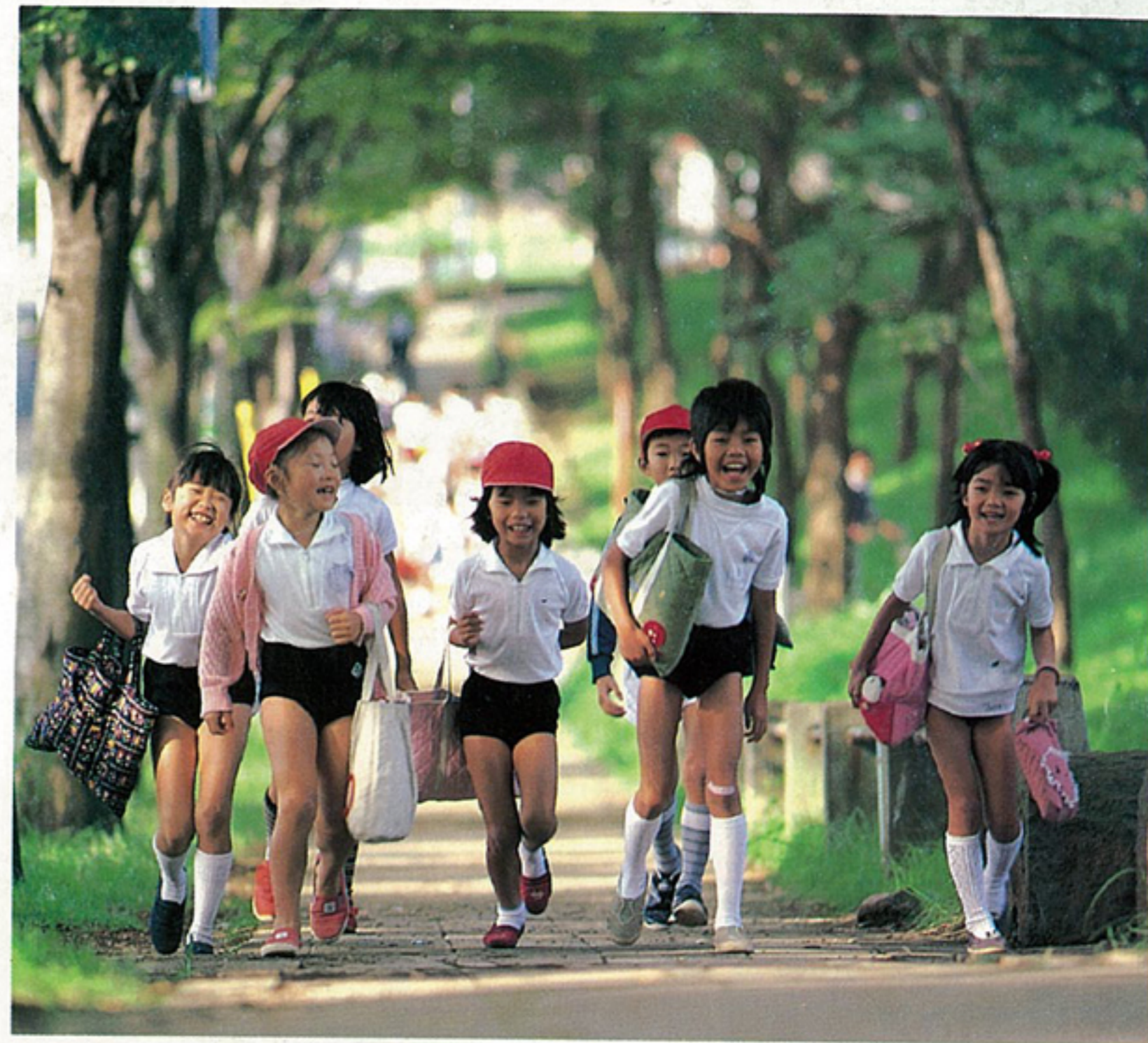
緑丘

海外特集 Part II

昭和六十一年六月二十日



社団法人 緑丘会



緑丘会東京事務所
 東京都豊島区東池袋三ー一ーサンシャイン60(57階)
 電話 〇三(九八一)二三四〇

人間の環境を豊かにするヒューマナイザー



東急建設株式会社

取締役社長 八木勇平(昭和8年卒業)
 〒150 東京都渋谷区渋谷1-16-14
 渋谷地下鉄ビル TEL.03(406)5111

英語外人教師の思い出

外事警察の尾行・カンニング事件



室谷 邦雄
(昭和13年卒)

私は昭和十三年の卒業だが、当時英語(コレポンを除く)の授業時間は志望によって、週九時間、七時間、五時間の組に区分され、英語の得意な人や好きな学生は九時間組に、苦手の連中は五時間組に、その他の者は七時間組に分れて編成されていた。七時間組が三クラス、九時間組と五時間組は各一クラスであった。私は二年のとき九時間組、三年のとき七時間組に加わった。

当時英語の外人教師は、マッキンノン、メーチン、ストーリー、ファーマインジャーの各先生であった。九時間組の連中はすべての外人教師から授業を受けていた。(以下先生の尊称を略す)私はマッキンノンから会話、メーチンとストーリーか



メーチン先生を囲んで 3年D組

省の許可を受けた範囲でしか引出せないようなことになっていった。この時期、私が日銀小樽支店の担当者だったという奇縁である。窓口に来た先生が私の顔を見て安心し、私もできるだけの便宜を図って差し上げた。困ったことは小樽警察署の外事係が先生の尾行だけでなく、私をも尾行し行動を監視したことである。或る日、先生の官舎を訪問して帰店したら、早速警官が来て「何の用で行ったのか、どんな話をしたのか」と質問され、あまり接触しない方がよい、と注意を受けた。この時期、先生は如何に苦しんでいたか、身近なものとして身を切られる思いをした。日銀の窓口でお目にかかったのが最後で、抑留後アメリカに送還された以後お目にかかる機会がないまま五十二年十一月先生が他界された。開戦当時金沢四高の学生だったリチャード・マッキンノンさんにその後お会いでき、何となく区切りがついたように思った。メーチンとファーマインジャーについては、特別な思い出がある。英文簿記(選

ら英文法と英文学、ファーマインジャーから英文簿記を教えてもらった記憶がある。マッキンノンはお茶目なベテラン教師、メーチン、ストーリーは真面目なジェントルマン、ファーマインジャーはヤンチャな若者という印象を受けていた。

ストーリー、ファーマインジャーは当時の私たちとあまり違わない年齢で仲間のような間柄だった。外人の英語授業の中心はマッキンノン、メーチンであった。マッキンノンの「Question, Why, Not Ask」のテキストで、いじめられた記憶が懐しい。竹(バンブー)お茶(ティー)風呂敷(フロシキ)などのテーマでquestionをつくってこいという宿題を出されたことを今だに覚えている。

メーチンとはよく小樽郊外の蘭島海岸へ泳ぎに行った。メーチンは日本語を学ぼうとして、特に私たちと仲良くしていたように思う。人気があって卒業アルバムには五組のうち四組のクラス全員記念写真にメーチンが加わっている。

マッキンノンについては皆さんご承知のことと多く語る必要はないが、私のかかわり合いについて、とっておきのことがある。この機会に発表しておきたい。それは昭和十六年十二月、日米開戦前後の時期のことである。マッキンノンは敵国人扱いにされ、行動の自由を束縛されていた。預金の引出しなども「外国人取引取締規則」の施行によって、自由に行うことができず、日銀を通じ大蔵

扱科目)のカンニング事件ということがあった。試験を受けた一部のものの答案に、内容は不都合だが決算尻だけが正解だというのが見つかった。これは正解の答案の結果だけをカンニングして、最後の答を書いたのだということになった。当時の学生気質からすれば、こんなことは、稚気愛すべしということで大したことではなかったが、出題者がファーマインジャー、試験場の監督がメーチンという外人教師の組合わせだったため、思わぬ方向に進み、教授会にまで持出されたのはびっくりした。はっきりした結末の記憶はないが、この事件で処罰を受けたものは居なかったから、何とか無事おさまったのではなかったかと思っている。これらのことは、すべて今は昔の物語りになった。



鎌倉 昭二

身元(六三、三三、三三)はマッキンノン先生のお話など、さんと三人で、元を取

追想・マツキンソン先生

— 緑丘O・B —

最後の訪問者は?



鎌倉 啓三

(昭和15年卒)



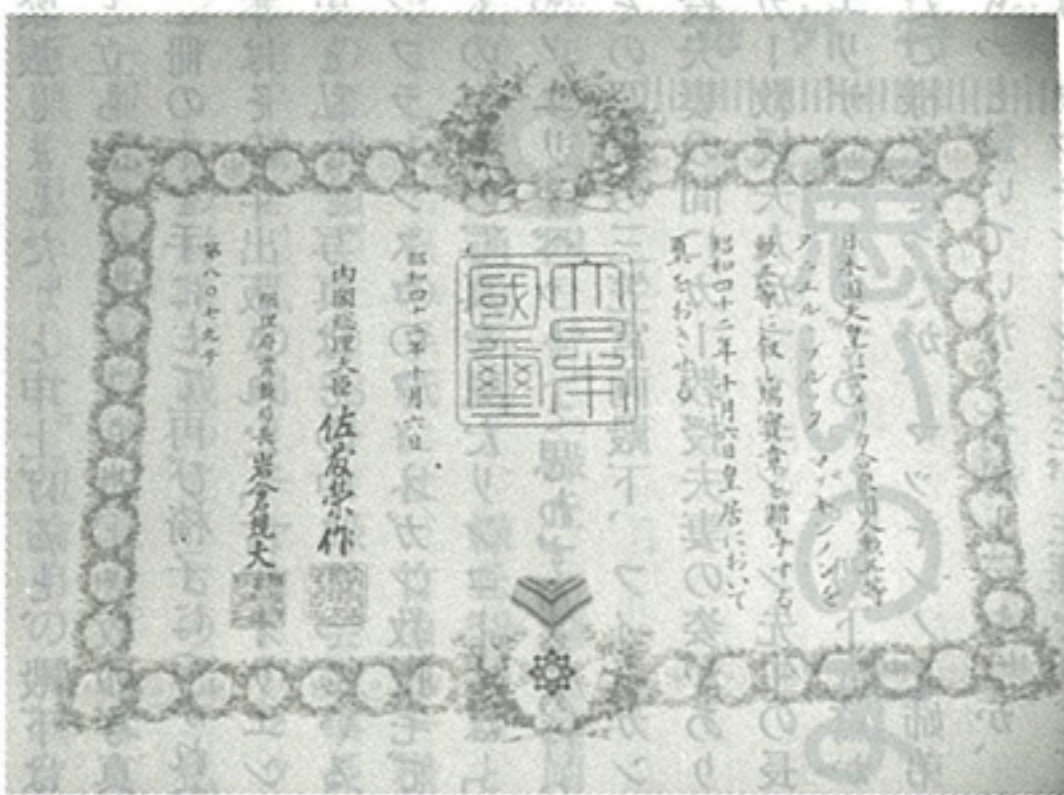
一九六七年 卒業生の招きにより
来日された折勲三等瑞宝章を受章
された喜びのマツキンソン先生

我々小樽生れの「小樽の人」として、ロバに引かせたカトトに三人の子供さんをのせて小樽の街を散策するマツキンソン先生のお姿は小さい時からなじみ深いものであった。

昭和四十四年七月九日、私はパークレーのお宅に初めて先生ご夫妻を訪れた。ヴァンクーバ、ポートランド、シアトル、サンフランシスコ、ロスアンゼルスと太平洋岸の各港を歴訪する出張の途次である。昭和十五年三月卒業式でお目にかかって以来既に三十年の歳月が流れていた。その間には日米戦争という悲劇の一幕があったが、私をあたたく迎え入れて下さる先生のお姿は殆ど昔と変わらなかった。

先生はまず応接間のテーブルの上に展げられた勲三等瑞宝章の勲章と勲記を、昨年君達同窓生のお蔭で日本を訪れた時いただいたものです」と感激の面持ちで私に示された。この日の午後、私をユニバシティ・オブ・カリフォルニアのキャンパスにご案内下さった時、先生の背広に勲三等の略綬をつけておられたのを忘れることが出来ない。

数年前私は文部省で先生のことを少し調べたことがあるが、文部省に保存されていた、この時の叙勲のために提出された履歴書と功績調査をみる機会を得た。大正六年から昭和十六年十二月八日迄、我が母校における先生の英語教育に対する献身、又戦後母国に引揚げられてから



内閣総理大臣 佐藤 栄作
昭和十五年十月六日
日本国文部省に於ける
マツキンソン、オシチ
ノ、折勲、三、等、瑞、宝、章、を、受、章、す、る、事、を、証、す、る、文、書、に、お、い、て、
昭和十五年十月六日、東京、文部省、文書課、長官、佐藤、栄、作、

の御一家の動静をも含めての詳細な記述はまことに感銘深いものがあり、更に私を驚かせたのは、時の内閣総理大臣佐藤栄作氏の特別の推挙があった旨をこの記録が留めていることであつた。

先生のお部屋でお茶を頂きながら、小樽の思い出話を伺った。昭和六年卒業の

私の長兄のことをよく覚えておられて、こんな話をされた。「昭和の初め、君の兄さんが入学した頃、小樽のある外人宣教師にカマクラを知っているかと聞くと、彼女は知っています、大仏の鎌倉ですという。私は二つ知っている、大仏の鎌倉と今度私の生徒になった鎌倉（小生の兄のこと）ですと云った。君が入ってきて三つの鎌倉を知り、今は四つの鎌倉を知っている、四つ目は雪国のかまくら遊びです」と笑っておられた。「おい、くつです」と問うと、「今年にはアンラッキー・イヤーです。セブンティナイン、セブンは「七」な「七」に通じ、ナインは「苦」で「七」の難苦の年です」としゃれを云われた。

お別れをつげたその日のパークレーの空は抜けるような碧さであつた。それから七年の月日が流れた昭和五十二年の二月、私は再度パークレーのお宅を訪れた。何やらダンボール箱が沢山積み重ねてあり、近日中午に近くのアパートに引越しをするところだと云われる。でも設備のよい住いのことを楽しそうに

の御殿に三笠宮崇仁親王殿下を訪ねた。先生の次女のリンコーナ・ギルフォイルさんが「戦後まもない頃、カナダ大使館で、ある集りがあり、姉のエリザベスが講師で話をする事になっていたのですが、都合が悪くなって出られなくなり私が代理で姉のペーパーを読みましたが、殿下がすぐ前に座っておられたので大変緊張しました」と申上げると、殿下はつと立ち上って奥に入られ、一枚の写真と二冊の本を手にして再び椅子につかれた。本はその年出版された「古代オリエント史と私」で写真はその中ののっているサンフランシスコのフィネガン教授宅のもの、その写真を見たリンコーナは「あつ！エリザベット」と思わず声をあげた。その写真の三笠宮兩殿下、フィネガン教授夫妻の間にカー教授夫妻の姿があり、カー教授夫人がマッキンノン先生の長女エリザベスなのであった。殿下も驚かれたご様子だったが、マッキンノン姉弟はもっと驚いていた。奇縁と云おうか、私は、マッキンノン先生が生涯を通じて献

身された太平洋を結ぶ日米の架け橋が、いま眼前にくつきりとその姿を現わすのを感じたのである。殿下は御著書に夫々献辞をしたためられて、その写真も一緒にマッキンノン姉弟に贈られた。先生と共にバークレーのU・Cの構内を歩いていた時、ある老人に「あの方はどなたですか」と問われ、「私の三十年前の英語の先生です」と答えると、「マッキンノン先生がnot only English but also to teach character」と申されたそのお声をいまでも鮮烈に思い浮べることが出来る。そしてこの先生に学んだ青春の日々を、あの緑丘の学び舎とあの芝生の色と共にこの上もない幸せであったと回想にふけるのである。



小樽駅

海外特集

思いのおもひ



リンコーナ・M・ギルフォイル (マッキンノン先生御息女)

「昨年三月四日付で「緑丘」の編集長岡林宏様から一通の手紙と、緑丘58号がとどきました。その手紙には、竹山涼一様からのご依頼でこの58号に緑丘会理事長八木勇平様と、私の弟リチャード・マツキンソンとの対談が載っているの、私にも一冊送りますとの事でした。私はとても有難く思いました。勿論弟の対談を読ませていただくのはうれしうございまして、たまたまこの58号には私の存じ上げていた方々の悲しいニュースが載っているのので驚きました。ダニエルズ先生とストリー先生の思い出、ストリー先生は私は直接存じ上げませんでした、ダニエルズ先生が奥様のおとめ様と、私共の

まるい家の隣に引越していらした頃の事を思い出しました。それはカメラロン先生が奥様と二人のお嬢様を連れて英国にお帰りになったあとにいらしたのです。私がまだ小学生の頃でした。弟と私はよくカメラロン先生のお嬢様達と遊びましたが、ダニエルズ御夫妻にはその時お子さんがいなかったのので淋しく思った事を覚えています。勿論ダニエルズ御夫妻は私共より先に英国へ帰られたのですが、不思議な御縁で一九四四年に私がエール大学で日本語を教えていました頃、ロンドン大学から私宛に一冊の本がとどきました。開けてみますとDictionary of Japanese (Sōsho) Writing Forms by Otome

Danielsとありました。今でもこの本を大切にしています。次に驚きました事は、木曾榮作先生がお亡くなりになった事でした。これは全く存じませんでした。木曾先生にもいろいろな思い出があります。そして最後に野口誠一郎様もお亡くなりになった報告、とてもとても悲しいニュースでした。野口家とは誠一郎様のお父様の代から、何かと御縁があり、父が卒業生に招かれて日本に来た一九六七年(昭和四十二年)の時も小樽で泊めていただきました。その野口様も前に申しました竹山様も、「だんだんと貴女のお父さんを知っていた人が減って行く、そして小樽の人にマッキンノンと言う名前もうすれて行く。今の

内に早く本を書いてマツキンノンとはど
ういう人物だったか皆に知らせてくださ
い」とのことでしたが「言うは易し、行
うは難し」で中々実行に移せません。野
口様には、お亡くなりになる二週間位前
に小樽のホテルへわざわざ訪ねて下さり、
お会いしました。大へんお元気そうでし
たが、今から思うとお別れにいらした様
に思えます。

この58号を岡林様が私に御送り下さ
いました時、何か父の思い出か、小樽につ
いて投稿してほしい、との事でしたが、
三月に旅行を控えていましたので、締め
切りに間に合わずお断り致しました。と
ころが昨日又、岡林様から緑丘60号と御
丁重なるお手紙がとどきました。ご依頼
を受けてから早や一年も過ぎてしまつた
かとハツとしました。岡林様が根気よく
お待ち下さっていらつしやつたのかと敬
服致しました。

父ダニエル・ブルック・マツキンノン
(D. Brooke McKinnon) は一八九十年
(明治二十三年) 十二月二十五日にマサ

チューセツツ州サマビル(ボストン市内)
で生まれました。父親はスコットランドか
ら一八八二年(明治十五年)にアメリカ
へ移住し、一八九二年(明治二十五年)
に市民権をとり、母親は英国からアメリ
カを経てカナダに渡った、ニコルス家の
娘でした。そして一八八九年一月元旦に
ボストンで結婚しました。

父親は大へんやさしい静かな人で、母
親はおそろしい程きびしい人だったそう
です。私の父が始めて日本にきたのは、
ハーバード大学を卒業した一九十四年(大
正三年)の事でした。本当はそのまま大
学院に入り、経営学(Business Adminis-
tration)を専攻したかったそうですが、
母親はそれを許さず、自分の一人息子が
いづれハーバード大学の教授になる様に、
と願っていました。

丁度その頃日本の文部省から、ニュー
ヨークのY・M・C・Aを通して、資格のあ
る英語教授を推薦してほしい、と大学側
に申し出があったので、母親の許しを得
て父が日本に来る事になりました。そし

てその夏ボストンから汽車でワシントン
州に向い、タコマから大阪商船のパナマ
丸に乗って横浜港へ着きました。此の
様にして方々の大学から集められ
た教授一行は、Y・M・C・Aの主催のもと
に軽井沢へオリエンテーションに行き、
そこで日本の文化、歴史、礼儀、習慣の
手ほどきを受け、それから日本中の色々
な学校へ送られたそうです。

父が送られた学校は山口県下関の近く
の長府と言う所の、豊浦中学校(現在豊
浦高校)でした。長府は古い城下町で乃
木大将の出身地でもあり、古いお寺や神
社が沢山あり、歴史の浅いアメリカから
来た父は、この土地にすっかり魅せられ
ました。長府では一年だけ教える事にな
っていた様でしたが、大変そこが気に入
ったので、父はバイブルクラスを始めた
り、剣道を勉強したり、すっかり住みな
れた様です。

長府に壇具川と云う川が今も流れてい
ます、この川沿いにバプテスト教会があ
り、父はそこへ日曜毎に行きました。そ

こである日、英語のできる婦人に会いま
した。その婦人こそ、のちにMis. Mc
Kinnonとなつた三嶋葵子でした。私の母
はクリスチャンで母親も祖母もクリスチ
ヤンでこの教会に属していた様です。

一方アメリカでは一年たつても息子が
帰って来ない事を案じて、母親は父の十
歳年下の妹マーガレットを連れて日本に
やってきました。一九十五年(大正四年)
八月の事でした。マーガレットは十五歳
でした。そして教会を通して、英語の出
来る唯一人の養子とすつかり仲良しにな
りました。けれども母親の方はその時点
では会つてもくれなかつたそうです。母
親とマーガレットはまる一年父と一緒に
長府で暮らしました。そして翌年一九十
六年の夏、三人はアメリカへ帰りました。

母親とマーガレットはボストンへ戻り
ましたが、父はバークレーへ行き、カル
フォルニア大学院に入り、一年間で二年
分の勉強をして、マスターズの学位をと
りました。
アメリカへ帰る前に、当時の小樽高等

商業学校の初代校長渡辺先生から、学位
がとれたら是非小樽高商へ来てほしい、
とお話があったそうです。そして父は一
九十七年(大正六年)八月に、又日本へ
戻つて来ました。母と結婚したのはその
年の十二月、東京ででした。そして今度
は小樽高商に勤める事になり、渡辺校長、
伴校長そして、苦米地校長と、実に立派
な人物のもとで、父は第二次世界大戦真
珠湾攻撃の日まで、ずっと教壇に立ち続
けました。そして沢山の生徒を育て、小
樽市民に大へん親しまれ尊敬されました。

私はマツキンノンの二女でリンコーナ
と申します。小樽生れです。大正九年二
月十二日アブラハム・リンカーンの誕生
日に生れたので、父がリンカーンの名前
に「A」をたしてリンコーナ(Lincolna)
としたそうです。世界中でこの名前を持
つものはおそらく私一人だと思います。
父はオリジナリテイが大変得意でした。
私共が赤い屋根の丸い家に引越す前は、
緑町に住んでいました。地獄坂をのぼつ
て左へ折れるとすぐの家でした。私達が

小さい時、小樽には牛乳がなかつたので、
父は先づ山羊を飼いました。そして山羊
の乳をしぼって、私達に飲ませました。
スエタケ牧場は私達が丸い家へ引越した
あとに出来ました。ここへも父はよく
私達を連れて行ってくれました。でも山
羊が余り鳴くので近所迷惑となり、山羊
を他所へあげました。でも動物好きの父
は、次にロバを飼いました。そのロバは
中国産で、日本ではまだまだ珍らしいも
のでした。兎の様な長い耳をしていて、
小樽の人はよく兎馬と呼んでいました。
ピノキオと名づけ、こげ茶色の毛をして
いました。

そのロバに長いそりをつけ、冬の地獄
坂をロバに引っぱらせ、高商の生徒達と
一緒に坂の上からすべり降りた子供時代
の思い出もあります。緑町の家から、ま
るい家に引越してから父は雌ロバを一頭
飼いました。ロバの名はベス、ピノキオ
よりも毛の色もうすく、おとなしい、や
さしいロバでした。父はこのロバに私達
を代る代る乗せ、空地で乗馬を教えてく



▶山羊とお散歩姉と私



▲小樽公園で
姉 父 弟リチャード
ロバのベス ロバのピノキオ



▲赤い屋根のまるい我が家後に見えているのがキヤメロン先生の家



▲1967年 60歳を祝って (国際文化会館にて)

▼玄関の前で全員揃って



れました。父はピノキオに乗り、私達はを下って行く、すると遅れそうになって代る代るベスに乗って市場へ一緒に買物へ行ったり、天狗山へ登ったりしました。行く何人かの生徒を、次々にヒョイヒョイとベスに乗せては又学校へ戻る。そんな思い出を持っていて、同窓生が何人もいて「ロバのおじさん」と呼ばれる様になりました。私が市立女学校に入ってから、父は朝の二時間目のない日には時々私をベスに乗せ、自分はピノキオに乗り、あの女学校への長い道なら坂をパカ／＼と上って行くのがとてもうれしく感じたことでした。私をおろしてか、父はベスの手綱を左手にとって坂道

を下って行く、すると遅れそうになって、ハハハ言い乍ら、坂を走ってのぼって、くる何人かの生徒を、次々にヒョイヒョイとベスに乗せては又学校へ戻る。そんな思い出を持っていて、同窓生が何人もいて「昔、ここにマッキンノンと言う人が住んでいました……」と説明が書いてあります。浦島太郎の様な話です。私は小樽へ行くとき必ずそれを見に行きます。小樽名物の中に「マッキンノンと言う先生」と「赤い屋根のまるい家」と「ロバ」がありました。今は子ロバだけが昔を物

語っています。大変うれしい事です。一昨年の五月二十一日久々に小樽へ行きました。昼頃に国際ホテルに着き港の見える部屋に泊りました。二十三日には榎谷真一様が奥様と共に、私を商大に連れて行って下さいました。榎谷様は私を新しい藤井学長に紹介して下さい、その後、新しくなった校舎のまわりを散策しました。旧校舎の一棟だけが残っていて、何となくホッとしました。海に面する方には昔ながらの、大きなポプラの木が並んでいました。これは私が小さい時、小樽公園を通って緑小学校へかよう時、遠くから見えていた風景でした。その少し奥に父がいつもロバをつないだ、枝の広がった木が残っていました。私は三日間滞在した間に見たいものは全部見、歩きたい所は全部歩いた、ように思えます。尤もあの愛した赤い屋根のまるい家は、もうなくなっていました。……、あのまるい家も父のアイデアでした。此の頃は、まるいビルやホテル等はあちこちに見られますが、当時は全く珍しいものでし

た。洗心橋から坂を登りきった春日台の左手にポツンと洋館が二軒——一軒はキヤメロン先生の家で、奥の方が父の設計した赤い屋根のまるい家——二軒共高商の官舎でした。そこへ緑町から引越したのは、私が六つの頃で、そこから緑小学校へ始めて通いました。あの頃は家のまわりに数軒しか家が建っていなかったの、ずいぶん遠くから赤い屋根が見えて、小学校から小樽公園をぬけていそいそと家へ帰ったものでした。あの家は、末だに無性に懐かしく思い出されます。高台なので二階のバルコニーから小樽の港がひと目で見渡せて、あの頃はいつも色々な船が見えました。私はあの港が大好きでした。まさしく「海の見える町」そのものでした。この本を書いた伊藤整も父の教え子でした。父はボストンに生れ、ハーバード大学卒業まで、そこに住んだ本家のニューイングランド(New England)としたから、当時のニューイングランドの大学の様に、家の外側には蔦を

はかせ、家のまわりを全部庭でかこみました。父は非常に庭造りが好きで、あの高い石垣には落葉松の他に、春は山吹が咲き、秋には一面に赤い萩の花が長く垂れ下り、右手には、きれいな藤棚と、サクラランボのなる桜の木が二本ありました。私の小学校時代はあの石垣の下が全部畠だったので、冬は庭でスキーをはいえずいぶんそこですべったものです。女学校時代に分譲地となりましたが、なかなか家が建たなかったもので、よく近所の子供達と、その空地で走り回って遊びました。冬になると一階の窓まで雪に埋もれ、二階のバルコニーからスキーをはいて、一面の銀世界をすべりながら、山づたいに女学校へ通った事もありました。裏にはロバ小屋があり、家とロバ小屋の間に中庭があつて、そこにアカシヤの木と紫の花のライラックの木がありました。五月頃にロバを見に出ると、裏口を出ただけで甘いライラックの香がしたのは、今でも忘れられません。昨年六月十四日付の週刊朝日に「驢馬に乗った先生」と言う題で夏堀正元様が、沢山のきれいなライ

ラックの花の写真の下に随筆を書いていらっしゃいました。ライラックの花を見ると私の父を思い出す、とお書き下さっているのです。私はこれを読んでとてもうれしくございました。父が亡くなって今年十一月二十三日で十年になります。でも毎年何らかの形で、父の事を必らず思い出して語って下さる方がいらつしやいます。その度に私は感激し感謝しています。夏堀様は小樽中学で父に英語を教わったそうです。そして「山羊のように優しい眼をした瘦せた先生」云々……、そして「ライラックの季節になると、わたしはしばしばマッキンノン先生の温顔を思い浮かべるのである。」としめくくってありました。私の友達がたまたま此の雑誌を手にして私に送って下さいました。これを読んでうれしくて早速此の方にお礼状を書かなければならない心境でした。特に庭の手入れのアドバイスを書いてある「Gardening Do's and Don'ts」のページで色々な色のライラックの写真があるのです。何と父にふさわしいページにこ

の記事をお書き下さったのでしよう。父がきつとニコニコして見ているだろうと思ひました。前にも申しました様に、父は庭造りがとても好きでしたから、私達三人の子供に、裏庭で同じ大きな畠を受持たせ、その中で種を蒔き、雑草をとり、水を与え草花の成長を楽しむ事を教えてくれました。そして父の育てた草花を母が切つて生け花として飾る事を父は何より満足していました。この様にして誰かが父の事を思い出して下さる間は父はまだまだ立派に生きていると思ひます。『おたる』と言う月刊誌があります。それにも何年か前に「我が人生」と題して小熊建様が二回も父の事を書いて下さいました。それを私の女学校時代のお友達か或いは他の高商の卒業生の方が私に送って下さり、私は大へん幸せ者だといつも感謝しています。私は明後日ボストンの叔母マーガレットに会いに行きます。叔母は七月に八十

六才になります。今でも母の話をするとき涙ぐみます。母を思うと何よりも笑顔を出し出すそうです。「あんなにやさしい人に出会った事はなかった」と母からもらった紫ちりめんの紋付羽織を今でも大事に持っています。小樽の思い出、父の思い出、母の思い出は数限りなくあります。子供の眼で見れば、それから自分が親になってから理解出来た数々の教訓、親と子のつながりの大切さ、師弟愛の尊さ、私はいつか本にしようと英語で書き続けています。書いても書いても書き足りない様に思われます。この拙い文、そして余りにも長くなつた事をお許しく下さい。昭和五十九年三月十二日 一九八六年(昭和六十一年)三月十二日 日ボストンに出版する前にリンコーナ・M・ギルフォインが水びげば誰いげばインターナショナルな美しい風波 第五回いげばな世界大会 愛しているもの 企画委員長 私と日本と呼ばれる園の間について